



おとひめ

令和8年6月24日(水)



「ありがとう」の心

山口小学校長 吉村 康介

昨年度のこの時期、私が児童玄関の掃除をしていた際に、ある6年生から「校長先生、ありがとうございます」と声をかけてもらった出来事を書きました。あのときの児童はきっと、「僕の大切な学校を校長先生も大切にしてくれている」と感じ、自然と感謝の言葉を口にしたのだらうと思います。心を打たれたこのエピソードは、今でもときどき思い出します。

それから一年が経ち、今年度もまた似た出来事がありました。先月のことです。校舎南側の斜面の草が伸びていることが気になってはいたものの、なかなか刈る時間を作ることができずにいたときです。翌日から数日間は雨の予報でしたが、その日は晴れておりましたので、「今日を逃してはしばらく作業ができない」と思い、斜面の草刈りを始めました。一時間ほど作業をした頃、ちょうど子どもたちの下校時刻となり、私は手を止めて子どもたちに「さようなら」と声をかけました。すると、下校の列の最後尾を歩いていた5年生の二人が、「さようなら」とともに、「ありがとうございます」と声をかけてくれたのです。その言葉を聞いたとき、先に書いた出来事をまた思い出しました。同時に、ふと、私自身が小学生のときのことも考えてしまいました。果たして自分は小学生のころ、「誰かが学校を整備してくれていること」に目を向け、感謝の気持ちをもつことができていたかということです。おそらく当時も、先生方や多くの大人が目に見えないところで学校を支えてくれていたはずですが、残念ながら私はそのことに思いを巡らせたことはなかったのではないかと思います。そもそも、子どもにとって、そこまで考える必要はないことなのかもしれません。しかし、この子たちは、「自分たちの学校が誰かによって支えられている」ということに気付き、「ありがたい」という気持ちをもっている。その感覚は、どのようにして育まれてきたのでしょうか。決して教え込まれるだけで身に付くものではないはずです。きっと、日々の学校生活の中での人との関わりや、周りの大人の姿、そして家庭での何気ない会話を通して、少しずつ育ってきたものではないかと私は思っています。誰かが誰かに感謝の気持ちを表している場面に触れたり、自分自身が温かく関わってもらった経験を重ねたりする中で、こうした心が自然に育ってきたのだと思うのです。また、「してもらって当たり前」とならない経験、つまり、過保護にされなかった経験も、大切な要素の一つかもしれません。さまざまな関わりの積み重ねが、子どもたちの中にあるやさしさや感謝の心を育てているのだと思います。

山口小学校は、小さな学校です。しかし、小さな学校だからこそ、こうした一人一人の姿がよく見え、心身の成長を実感することができます。子どもたちがもつ優しさや感謝の心を、これからも大切に育てていきたいと、改めて感じた出来事でした。

